川柳マガジン東京句会12月句会（第三十回）

平成二十年十二月十四日（日）　駒込学園にて

参加３１名　出席３０名、投句１名

甲野竜雄、杜田倫也、山口平桜子、佐道正、小倉利江、若山かん菜、五十嵐淳隆、星野睦悟朗、白瀬朔太郎、藤井成子、秋山和子、南野耕平、棚瀬くんじ、安藤紀楽、土江裕美、菊池順風、髙田以呂波、丸山芳夫、藤原栄子、関玉枝、加藤品子、横山きのこ、水野絵扇、末田りつ子、河野桃葉、渋川渓舟、黒田鐵雄、高野雲酔、松橋帆波、植竹団扇。

投句　菅井京子

◎「今年のニュースから」　松橋帆波選

「佳作」

日本で悔し涙を拭くみずき　京子
作曲家逝って演歌が又寂れ　利江
芝目読み長者になった王子様　きのこ
室伏へまたすんなりと来ぬメダル　紀楽
グーだったのはアラフォーのエドはるみ　京子
ロス疑惑謎を残して彼の世ゆき　栄子
アフガンに命を懸けた子の無念　淳隆
二度出しの刺身の高い老舗です　竜雄
カド番の土俵をよぎるゼニの影　淳隆
中国産安いが毒のおまけ付き　りつ子
わが孫も末は総理か漫画好き　睦悟朗
字の読めぬ総理に親しみを覚え　芳夫
天国と地獄を覗く音楽家　栄子
エベレスト極めた後期高齢者　きのこ
ニートから脱出をする銀メダル　栄子
アラフォーが一人勝ちする女子テニス　正

「秀作」

キャンパスで土俵で大麻育てられ　紀楽
キャデラック今は昔の物語　倫也
大臣が二日持たない変な国　倫也

「特選」

あなたとは違うんですが辞世の句　順風
軸・アメリカンドリームねずみ講だった　帆波

《選後評》

今年一年は様々な分野で記録・記憶に残る出来事があった一年でした。その一年を振り返って作品を詠んでいただく課題でした。集句は多肢に渡っておりましたので、この一年を振り返る意味で、より多くの作品を読み上げさせていただきました。これまでに多く読まれているものにつきましては、活字としては発表いたしませんが「前抜き」として読み上げさせていただきました。

「佳作」以降は、今後も折に触れて２００８年を振り返るときに、記録として残せる作品だと思います。　帆波

◎　川　マ　ガ　流　「　袋　回　し　」

皆様に三つのグループに分かれていただき、十個の課題で三分間吟、選考、披講をしていただきました。抜句数は秀句三句、特選一句は必ず選ぶこと。佳作は各自の判断による。というスタイルでしたが、佳作を取る方は少なかったです。

「　星　」水野絵扇選

「秀句」

万歩計帰るに惜しい星明かり　淳隆
夕暮れに一番星を君と見る　きのこ
早番の父を見送る明けの星　淳隆

「特選」

願い事中途半端の流れ星　以呂波

「　星　」加藤品子選

「秀句」

七夕も年に一夜じゃ浮気する　くんじ
オリオンが冬の星座を連れて来る　紀楽
流れ星今日の見合いはダメだろう　紀楽

「特選」

星月夜屋根にメルヘン満ちてくる　朔太郎

「　星　」南野耕平選

「秀句」

願い事言い終えぬうち星が消え　睦悟朗
郊外にプラネタリウムめいた星　芳夫
オリオンがこんな所に午前様　芳夫

「特選」

黒星で成績を言う上位陣　芳夫

軸・星よりも近いところに君がいる　耕平

「夢」村田倫也選

「佳作」

幼な児の夢はサンタの髭にある　淳隆

カバンにはずっと持ってる夢がある　きのこ

夢かない貴方と共に共白髪　絵扇

「秀句」

幸せな夢追う彼といい話　和子

諦めず追い続けてる恋の夢　以呂波

子の夢は母にはとても解らない　千枝子

「特選」

幾らでも好きな事言う夢の中　きのこ

「夢」甲野竜雄選

「佳作」

夢一夜そんな昔もありました　紀楽

夢かないあなたのお嫁さんになる　りつ子

人生は夢と判った持ち時間　品子

もう少し話していたい夢の母　紀楽

「秀句」

アメリカンドリームバブルとは知らず　紀楽

青雲を掴む心はまだ死なず　品子

春眠へ二度目の夢も二等兵　紀楽

「特選」

楽天家獏を一頭飼っている　団扇

「夢」星野睦悟朗選

「佳作」

初夢のネタも切れ出す高齢化　渓舟

父と見た夢がノーベル賞を産み　利江

「秀句」

恐るべし十七歳と見るゴルフ　順風

お互いの夢を語った走馬灯　順風

夢の中亭主関白演じてる　順風

「特選」

君の見る夢に出演してみたい　芳夫

「坂」関　玉枝選

「佳作」

下り坂ガラスの膝に笑われる　淳隆

狂乱の物価が怖い下り坂　淳隆

坂道で杖を休めて話し込み　和子

「秀句」

坂道の途中で気付く忘れ物　倫也

優しさは坂の途中にあるベンチ　以呂波

今日は今日明日はきっと上り坂　千枝子

「特選」

良い事もあったじゃないか下り坂　倫也

軸・朝錬の野球部今日も坂を駆け　玉枝

「坂」松橋帆波選

「佳作」

年の暮れまさかの坂を上れども　祐美

団子坂登って句会丸くなる　くんじ

女坂上れば下りは男坂　朔太郎

杖肩に意地を見せてる坂の道　くんじ

老いてなおゆるやかながら上り坂　紀楽

老いの坂妻とペットに支えられ　紀楽

富士見坂今ではビルが見えるだけ　紀楽

陽の当たる坂道の下僕の家　団扇

道玄坂あの山賊も名を残し　紀楽

「秀句」

偏屈という靴で行く八十路坂　紀楽

気張らずに妻と二人の女坂　団扇

談合坂因果な名前だと思う　紀楽

「特選」

アベックにだらだら坂が温かい　紀楽

「坂」丸山芳夫選

「佳作」

ガクガクと足にくるのよ下り坂　耕平

坂の上柿がたわわに実ってる　栄子

今月も楽しく急ぐ団子坂　睦悟朗

下り坂一歩一歩を確かめる　耕平

「秀句」

女坂このへんまでと膝笑う　桃葉

登りつめ下りの足が試される　渓舟

下り坂若い二人に嫉妬する　桃葉

「特選」

宅配が坂転げてる忙しさ　栄子

軸・坂の険しさが地図では読み取れず　芳夫

「削る」五十嵐淳隆選

「佳作」

鰹節削りに子供興味持ち　和子

身を削る思いも目方増え続け　正
宮大工カンナの数は数十種　以呂波
父からの鉛筆削り捨てかねる　和子
子沢山父の脛さぞ細かろう　成子

「秀句」
お小遣い削られ昼は握り飯　倫也
自営業寝る間も削り励む日々　玉枝
身を削る母にぬくぬくニートの子　千枝子

「特選」
深夜労働命を削る迄動き　和子

「削る」植竹団扇選

「佳作」
２Ｂを削ったような今朝の妻　朔太郎
鉛筆を削る時間に一句浮き　くんじ
医療費とペットが年金を削り　紀楽
削り節ダメですこれは猫のです　紀楽

「秀句」
派遣からまだ削り取る資本主義　品子
結局は休みを削る小商い　帆波
鉛筆を削れない子が人を刺し　紀楽

「特選」
自伝から削られている青い性　品子
軸・還暦になっても私荒削り　団扇

「削る」高野雲酔選

「秀句」
これ以上削る出費のない我が家　耕平
かつぶしを削り日本の朝となる　芳夫
昆布撫で薄く削るに拍手する　睦悟朗

「特選」
遣り切れぬ世へ鉛筆を尖らせる　渓舟

「拾う」秋山和子選

「佳作」
銀杏の葉拾うと手紙書いてある　きのこ
幸せを拾いに旅に出る私　千枝子
千円を拾い交番通り抜け　倫也

「秀句」
ヒマラヤのゴミを拾った日本隊　淳隆
拾わせたくせに威張った猫がいる　千枝子
十円を届けるバカが今もいる　千枝子

「特選」
ポイ捨ての紙屑拾うランドセル　淳隆
軸・家中の愚痴を拾って母強し　和子

「拾う」若山かん菜選

「佳作」
捨てられぬ所詮拾った恋だけど　団扇
下を見て歩くと何か拾えます　竜雄
落ちていた千円でする初詣　りつ子

「秀句」
百円を拾って靴が動かない　竜雄
拾う神に感謝されてる捨てる神　紀楽
拾ったと拾った子には言えぬもの　団扇

「特選」
拾った金で勝てぬギャンブル　団扇

「拾う」河野桃葉選

「佳作」
目が合った捨て犬を飼う事になり　利江
タクシーを停めたら他人さっと乗り　順風
十円玉を見つける裾の折り返し　芳夫

「秀句」
麻生さん総理の椅子は拾いもの　鐵雄
拾った恋だから大事に水をやり　順風
一億円拾う時には目が覚める　鐵雄

「特選」
麻酔覚め拾った命噛み締める　睦悟朗

「買う」藤井成子選

「佳作」
兼業の農家は米を他所で買い　淳隆
高いとは思うが自分に買うお洒落　玉枝
作らずに買っては捨てるバチ当たり　以呂波

「秀句」
スーパーの目玉に並ぶ同じ顔　玉枝
買い物の妻にひょこひょこ付いて行く　倫也
百均の買い物妻は可愛らし　千枝子

「特選」
クリスマスサブプライムを言い訳に　正

「買う」土江裕美選

「佳作」
空いているレジでは小銭整理する　団扇
入社式もう社の株を買った顔　帆波
並んでも買い物をする安いもの　竜雄

「秀句」

土産買う妻には少し高いもの　紀楽
試着して買って来た服気に入らず　紀楽
ショッピング一廻りして熱冷まし　品子

「特選」

シャッター街ジングルベルは幻か　品子

「買う」菊池順風選

「佳作」

クリスマス小さなケーキ妻へ買い　渓舟
売られても喧嘩買わずに宮仕え　睦悟朗
同じ本二度買って来て齢を知り　芳夫
五時からのバーゲン狙う主婦の知恵　利江
金はあるけれど買いたい物がない　耕平

「秀句」

買って来た物にいちいちケチがつく　耕平
関心を買ってハシゴを外される　鐵雄
バーゲンのチラシ媚薬が塗ってある　利江

「特選」

買い物に出ると夫婦の危機が来る　耕平
軸・買いたい物買うため別の物も買い　順風

「送る」高田以呂波選

「佳作」

隣席にメール送信して会話　正
別居した我が子に送る庭の柿　和子

「秀句」

ふる里へ都会の灰汁を送り付け　淳隆
届くまで夢が膨らむプレゼント　きのこ
実家から今年最後と来るりんご　玉枝

「特選」

リストラの親父に送る求人誌　淳隆

「送る」安藤紀楽選

「佳作」

民営化送った手紙心配だ　かん菜
新生のオバマへ影も始動する　品子
成田まで送って二度と会えぬ人　竜雄
これからと思うところでバイバイね　くんじ
狼と知らず送っている羊　竜雄

「秀句」

宅配へ母の気遣い送り付け　品子
煮凝りの好きな貴方に送る鍋　朔太郎
元気でと別れた友の喪の知らせ　りつ子

「特選」

何とかの一つ覚えでハム送る　帆波
軸・歓送会明日は我が身と知る不況　紀楽

「送る」藤原栄子選

「秀句」

見送りに来ない彼女にある覚悟　順風
携帯でマル秘メールを妻に出し　鐵雄
選挙区に伝令送る秘書の群れ　鐵雄

「特選」

宰相に欲しい送り仮名付きの辞書　利江

「崩れる」横山きのこ選

「佳作」

アメリカと無理心中はしたくない　倫也
崩壊の予兆にビビル日本丸　倫也
氷山の崩れる音を聞く地球　和子

「秀句」

六本木ヒルズがピサに見えてくる　倫也
物置の山が崩れて手が出せず　和子
我慢した顔が崩れる通夜の後　正

「特選」

山の手に住んではいるが崖っぷち　成子

「崩れる」棚瀬くんじ選

「佳作」

美男美女化粧崩れで縁切れる　かん菜
赤いバラ崩れる様に散ってゆく　りつ子

「秀句」

失意から三杯目でも崩れだす　竜雄
終章の文字の崩れが枯れている　朔太郎
砂山を崩して僕は王子様　帆波

「特選」

南極が崩れ地球はただの青　団扇

「崩れる」小倉利江選

「佳作」

落石に注意とやわな網をかけ　芳夫
アメリカの見栄が脆くも崩れだし　渓舟
一瞬で積み木崩しとなる世界　渓舟

「秀句」

崩れても母の弁当日本一　桃葉

やわらかいものはなかなか崩れない　耕平
年金を崩す社保庁許せない　鐵雄

「特選」
ピッチャーがひざまずいてるサヨナラ打　芳夫
軸・積み上げた苦労不況に崩される　利江

「燃える」佐道　正選

「佳作」
まだ燃える力もあるさ女です　玉枝

「秀句」
晩学の向上心が燃え盛る　淳隆
火をつけた犯人が来る火事現場　玉枝
私に誰か点火を願います　倫也

「特選」
イケメンが横に座って少し燃え　玉枝

「燃える」白勢朔太郎選

「佳作」
まだ燃えるものあり八起き目にかける　紀楽

「秀句」
追っ掛けは競争心で燃え上がり　品子
趣味の道ゆき晩学の灯を燃やす　紀楽
不完全燃焼ばかり老いの恋　紀楽

「特選」
新生のオバマへ燃えるドルを持つ　品子

「燃える」黒田鐵雄選

「佳作」
クラス会焼け棒杭へ踊る足　渓舟

「秀句」
握手してみたいな冬の陽の低さ　芳夫
恋成就真っ赤なりんご丸齧り　桃葉
どうせなくなる石油だふんだんに使う　芳夫

「特選」
火ダルマの家計と言われ休肝に　睦悟朗

「消える」山口千枝子選

「秀句」
消しゴムのカスに苦心の跡がある　倫也
削除キー押して個部屋に閉じこもる　淳隆
ふる里を出てから消えた立志伝　淳隆

「特選」
故郷からシャッター街に変わり果て　以呂波

「消える」末田りつ子選

「秀句」
あぶく銭消える儲けも損もなく　紀楽
孝行という字検定より消える　品子
宴会は黙って消えるのがマナー　団扇

「特選」
借金が消える魔術を覚えたい　竜雄

「消える」渋川渓舟選

「佳作」
子達巣立ち静かに消える腹積もり　睦悟朗
消えたいと思ったときは消えている　耕平
記憶力まだらに消えて齢を知る　利江
財宝も息子の代で消えている　栄子
もうひと花咲かせる恋をしてみたい　淳隆

「秀句」
野次馬ががっかりボヤで済んだ火事　芳夫
気付かれぬように消えゆくなんて無理　耕平
別々に二次会抜けて来た二人　芳夫

「特選」
消えてゆくものの全てが懐かしい　耕平
軸・負けたなと思うと語尾が消えてゆく　渓舟

合点は、佳作、秀句が各一点、特選各二点、と致しました。

『参考』
合点上位　紀楽23点、芳夫15点、淳隆14点、品子13点、団扇13点、耕平12点、倫也11点
抜句数上位　紀楽22句、芳夫13句、淳隆13句、品子11句、団扇10句、耕平10句、倫也10句

川マガ流袋回しは「短時間で沢山の句を作り、選考・披講を通じて、沢山の着想に触れ合う」ことを目的としております。同じ課題でも、参加者が違えば違う着想が集まるものです。改めて全体を読み直していただくことで、今後の作句の参考にしていただければ幸いです。

（まとめ・松橋帆波）